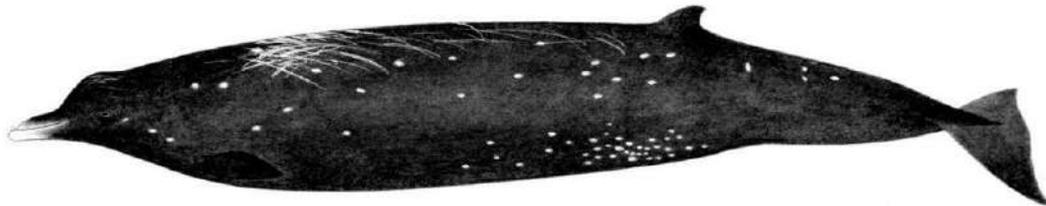


新種のクジラ「クロツチクジラ」を発表
～北海道オホーツク海沿岸に生息～

国立科学博物館は、北海道大学、合衆国自然史博物館海棲哺乳類部門とともに北海道沿岸に漂着した鯨類を調査・分析した結果、これまで科学的には認識されていなかった種が存在することを確認し、クロツチクジラと命名し、**Berardius minimus Yamada, Kitamura and Matsuishi, 2019** として記載しました。

本種が新種であると判断された根拠は、当該個体群が既知種に対し、下記の特徴を挙げられます。

- ・成熟個体の体長が有意に小さい
- ・体長に対する吻（ふん）の相対長が有意に小さい
- ・体色が黒い
- ・頭骨形態が異なる
- ・ミトコンドリア DNA および核 DNA に有意な差が認められる



学名：Berardius minimus

命名者：山田格、北村志乃、松石隆

英名：未定

標準和名：クロツチクジラ

イラストレーション 渡邊芳美画

ホロタイプ標本：国立科学博物館所蔵

北海道大学 松石隆教授が主宰している漂着鯨類調査グループ「ストランディングネットワーク北海道」(SNH) が、2008 年以降収集した北海道各地に漂着したアカボウクジラ科の 3 個体は、噴気孔の形態などツチクジラ属の特徴がありましたが、頭部をはじめ、外部形態が従来知られているツチクジラとは異なることが指摘されました。この 3 個体と既知のツチクジラ 67 個体からそれぞれ抽出した DNA シークエンスと、文献的に明ら

かにされていたミナミツチクジラの DNA シークエンスを比較考察して、明らかな相違を確認、既知種とは異なるツチクジラ属の未知種存在の可能性を提起しました。

本研究では、SNH が収集した未知種 6 個体の形態学的解析を行いました。これらのうち 4 個体については国立科学博物館で全身骨格標本とし、それらの形態学的特徴の把握と計測結果の多変量解析などを行い、この 6 個体は、形態学的に既知のミナミツチクジラ *B. arnuxii* およびツチクジラ *B. bairdii* のいずれとも異なる別の種である事が示されました。

日本の国立科学博物館の山田格名誉研究員と田島木綿子研究主幹は、国立自然史博物館（パリ）、合衆国自然史博物館（いわゆるスミソニアン博物館）、国立自然史博物館（ストックホルム）に収蔵されているツチクジラ属のタイプ標本を精査し、さらに、自然史博物館（いわゆる大英自然史博物館）、アカトウシュン博物館（ウシュアニア）などに所蔵のツチクジラ属標本をも加えて比較、検討を行いました。

今回調査した未知種の頭骨は各部の比率が独自であると同時に脳頭蓋形状などに顕著な特徴があり、この 2 種とは明らかに異なることが示されました。すなわち、この未知種の成熟した雄個体の体長が 6.2-6.9m であるのに対し、オホーツク海に生息する既知の *B. bairdii* 34 個体の平均体長は 10.0m（Kishiro 2007）と統計学的に有意に異なり、体長が顕著に小さいことが確認されました。

さらに *B. bairdii* 10 個体、ミナミツチクジラ *B. arnuxii* 7 個体と未知種 4 個体の頭蓋計測値の主成分分析および判別分析を実施したところ、これら 3 グループは重なりなく明確に分離されることが確認されました。

さらに 2014 年以降 SNH が新たに入手した未知種 3 標本をくわえた計 8 個体の未知種の遺伝子情報と、ツチクジラ *B. bairdii* 7 個体、ミナミツチクジラ *B. arnuxii* 2 個体のミトコンドリア DNA コントロール領域（879-bp）の分子系統解析を行ったところ、*B. bairdii*, *B. arnuxii* の遺伝的差異に比べて未知種と既知の 2 種との差異が明らかに大きいことが改めて確認されました。

上記の結果を総合して、この未知種鯨類は独立の種として世界のクジラに加えるべきものであるとの結論に到達し、新種 *Berardius minimus* として記載し報告するに至りました。

2019 年 8 月 30 日に、本発見は、科学誌ネイチャーが発行する *Scientific Reports* に掲

載されました。

日文新聞发布全文 https://www.hokudai.ac.jp/news/190904_pr.pdf

文：JST 客观日本编辑部翻译整理